

## 児童健全育成賞（数納賞）佳作

# 行ってみたい・遊んでみたい・ いっしょに何かやってみたい児童館を目指して —いい年をした新米館長が真剣に取り組んだ5年間の実践—

兵庫県神戸市

神戸市立ひよどり台児童館 児童館長 田中重明

### 1. はじめに～児童館って何？～

常にこどもの利益を第一に考え、こどもに関する取り組み・政策を社会の真ん中に据える「こどもまんなか社会」実現のため「こども基本法」が施行され、こどもの視点で、こどもを取り巻くあらゆる環境を視野に入れ、こどもの権利を保障し、こどもを誰一人取り残さず、健やかな成長を社会全体で後押しするために「こども家庭庁」が創設された。児童健全育成推進財団は「じどうかん こども Do まんなか」キャンペーンを行い、児童館の社会的認知の向上を図るとともにこどもの居場所としての役割を十分果たしてこどもの利益を最大限に優先するよう取り組んでいる。

私も一人の館長としてこどもたちのために「児童館はどうあるべきか」を真剣に考え、ひよどり台児童館の認知度アップとこどもの居場所としての内容の充実に真摯に楽しみながら取り組んできた。その5年間の実践について報告させていただきたい。

5年前、35年の中学校教員生活を終え、退職後は再任用公務員として働きたいという意向を教育委員会事務局の人事部門に伝えた。教育委員会事務局か学校現場だろうと思っていたら、辞令は福祉局政策課担当係長、そして神戸市社会福祉協議会へ派遣となり、神戸市立ひよどり台児童館に館長として着任することとなった。校長時代に3つの児童館の運営委員を務めたことはあったが、運営委員会に出席することと行事に顔を出すことぐらいしかやっておら

ず、児童館について十分な知識を持ち合わせていなかった。正直に言って畑違いから児童福祉の現場に飛び込んだ戸惑いがあった。しかし、児童館長の職を得た以上、その職責を全うするのは当然のことと自覚し、自分なりに努力しようと決意して着任した。着任早々でも施設の長になったことで、職員から様々な相談や質問をされる。「いや、そんなことは私よりあなたの方がよくわかっているでしょう。」と言いたくなることもあり、自分が試されているような、品定めされているような印象さえもったものである。「これは、早く自分が児童館を深く知らなければ仕事にならないぞ。」と考え、取りかかったのが「放課後児童支援員勤務の手引き」の作成である。これは自分自身のためであり、新しく当館で働く人のためであり、ベテラン職員が自らの仕事を見直すためのものでもあった。

おおよその内容は、以下の通りである。

#### 1 概論：

1. 児童館と学童保育・神戸市の現状、

2. 放課後児童支援員

#### 2 ひよどり台児童館では：

1. 学童保育一日の流れ、

2. 日々の業務、

3. 支援員の仕事 Q&A

#### 資料編：

施設配置図、保育日誌記入例、児童館ガイドライン（概要版）

手引きの作成で、児童館＝学童保育施設という

認識が間違いであることを知った。再任用館長の中には、このような勘違いをしている者が少なくない。それだけ学童保育が児童館の仕事のメインになっているからだろう。すべてのこどもたちのために児童館があるとすれば、これはいかなものかという疑問がある。一方、神戸市では児童館のほとんどが学童保育施設を兼ねることで待機児童「0」を達成していることも知ることができた。

翌年度からは職員に原稿を分担して加筆修正してもらい改訂版を発行し続けている（※令和5年度で4度目の改訂）。この手引きで業務を整理できたことをきっかけに、2年前から総務部・企画部・管理部・飲食部の四部に業務を振り分け業務分担を明確にして各業務にリーダーを決める仕組みを整えることができた。施設設備を新しくするなど労働環境を整えることも勤労意欲につながるが、早く効果が薄れる。職員の適性を把握して適材適所に配置し、しっかり役割をもたせることがやりがいにつながり、仕事へのモチベーション維持につながった。

また、この手引きの作成で自らの目標を明確に持つことができた。ひよどり台児童館が、学童保育という重要な役割を担いながらも原点に戻って本来の児童館の役割も十分果たしていくために何をすべきか。「児童館って学童の子しか行っちゃいけないのでしょ？」という声は何度も聞いた。こういった保護者や地域の誤解を解き、すべてのこどもの手に児童館を取り戻すため、私が掲げた目標は、

- 認知度アップで自由来館を増やす～広報と行事の充実～
  - こどもの手で児童館をつくる～こども主体の行事づくり～
  - 児童館を地域の子育ての核に～地域・他団体との連携～
- の3つである。

ここからは、この目標に沿った具体的実践について報告する。

## 2. 認知度アップで自由来館を増やす～広報と行事の充実～

### (1) X (旧 twitter) の活用

まず、手始めに地域で児童館だよりを掲示していただく箇所を8か所から12か所に増やした。しかし月に一度の児童館だより発行とその時にしか更新しないホームページでは、児童館をなかなか知ってもらえない。できるだけ労力をかけず手軽に広報する方法は何かと考え、令和3年9月からX (旧 twitter) を始めた。現在のフォロワーは50と決して多くないが、表示件数は100を超えることも珍しくなく多いときには600を超える。簡単なコメントと写真で行事を実施したその日のうちに広報したり、事後報告ではなく行事を告知したりと活用している。

### (2) ひよフレンズ (ひよどり台児童館友の会) の立ち上げ

令和2年度からICTシステム「安心でんしょぼと」が導入され、学童保育利用保護者に入退室通知、メッセージ送信、児童館だより配信を始めた。せっかく導入されたシステムをもっと有効に活用して児童館と地域の距離を縮める方法として令和4年9月から「ひよどり台児童館友の会」(通称：ひよフレンズ)の会員募集を始めた。学童保育を利用する児童は自動的に会員になるが、利用をやめた後も希望すれば会員として児童館だよりや行事案内を受け取れるようにした。午前中の親子館事業に参加している保護者に案内するとともに、小学校の全校児童にも案内文を配付し、学童保育利用の有無にかかわらず会員になれば児童館の情報を受け取れることを知らせ、会員を募集した。また、地域の皆さんでこどものために活動したいという方にはサポート会員として入会していただいた。令和5年9月現在、正会員124人(うち学童保育利用者77人)・サポート会員4人となっている。

### (3) コロナ下でも行事をやり続ける

ひよどり台は地域活動が盛んで以前から町をあげて8月に夏まつり、10月にハロウィンの

行ってみたい・遊んでみたい・いっしょに何かやってみたい児童館を目指して

イベント「ワイワイフェスタ」が盛大に開催されていた。しかし、新型コロナウイルス感染症感染拡大により令和2年から3年間は地域行事が全くと言っていいほど開催されなくなってしまう。

それなら児童館が感染防止策を徹底してこどもたちのために行事をやろうということになり、まず手始めに取り組んだのが新しいスタイルの夏まつり「ミニ夏まつり」である。具体的には、以下の感染対策を実施して開催した。

- ▶ 連絡先を登録していただき緊急時には連絡
- ▶ 入館時に検温と消毒を実施し体調不良者の入館をお断り
- ▶ 入替制と人数制限で密集を回避
- ▶ 利用終了毎にグッズ類を利用者といっしょに消毒

令和2年度88名だった参加者が令和3年度には倍の169名となったが、令和4年度は当日に気象警報が発表され残念ながら中止となってしまった。こどもといっしょに参加した保護者から「今年の夏、初めてこどもに浴衣を着させてあげることができました。ありがとうございました。」とお礼を言われたときは、つくづくやってよかったと思い、その感想を職員と共有して喜びを分かち合うことができた。

同様の感染対策を講じてミニハロウィンも実施したが、仮装したこどもたちや親子連れがたくさん参加してくれた。令和2年度111名、令和3年度132名、令和4年度194名と順調に参加者を増やすことができたが、今年度はひよどり台地域のハロウィンイベント「ワイワイフェスタ」が復活したので児童館としてブースを出展した。工作やゲーム、クイズなど100人分を用意したがわずか1時間半ですべてが終了する盛況ぶりであった。

### 3. こどもの手で児童館をつくる ～こども主体の行事づくり～

平成27年に学童保育対象児童が小学6年生まで拡大されて以来、当館でも高学年の利用が増え始めた。そんな高学年のこどもたちが「遊

ぶものがない。やることがない。」とぼやくのを耳にして、確かに数年間毎日のように通っていれば児童館の遊びに飽きてくるのももっともだと思った。だからと言って、毎年おもちゃや遊び道具を大幅に買い替えることもできない。一方、高学年児童が低学年のこどもたちを遊んであげている姿を目にすることが時々あった。それなら、いっそのこと高学年に児童館で働いてもらおう、活躍してもらおう。そして「自分たちは役に立っている。必要とされている。」という自己有用感を育てようと考え、以下のことに取り組んだ。

#### (1) ボッチャマイスターによるボッチャ大会 企画運営

きっかけは令和元年、障がい者の人権についての啓発活動として「ボッチャ教室」をやらせてもらえないかと人権擁護委員会から依頼を受け、こどもたちが初めてボッチャを体験したことだった。翌年が東京パラリンピック（実際には1年延期）ということもあって関心が高まっていたので、こどもたちの手でボッチャ大会を企画してみようと考えたが、大きな壁となったのはボッチャ用具が思いのほか高価だということだった。そこで一般財団法人神戸YJBと共同で「NPO どんどこプロジェクト」に「ボッチャでよっしゃ！～ボッチャで越える世代の壁・ボッチャでつなぐ地域の輪～」というテーマで応募し、幸いにも助成を得ることができ、以下のように取り組んだ。

- ① 3年生以上のこどもたちからボッチャマイスター候補生を募集
- ② ボッチャマイスター研修で基本的なルールを習得しマイスターに認定
- ③ マイスター会議（大会実行委員会）を開催して大会の企画
- ④ マイスターによるボッチャ大会の運営

令和2年度1期生4名、令和3年度2期生3名、令和4年度3期生5名がボッチャマイスターとなり、これまでに9回のボッチャ大会を企画運営し、延250人以上のこどもたちや大人が参加してくれた。中高進学と共に引退

したこどもたちを除き、現在は8名が活動を続けている。来年1月に第10回記念大会を開催するために準備を進めている。

## (2) 図書隊

当館には立派な図書室があり、マンガや絵本を中心に多くの書籍が壁一面の本棚に並んでいる。令和3年度に図書室のテーブルやイスを新しくしたのを契機に図書室を充実させたいと考え、神戸市教育委員会事務局勤務時代に同僚であった神戸市立中央図書館の課長（司書）にお願いして図書室や本棚、置いている書籍をチェックしてもらい、以下のような助言を得た。

- 学校図書館がONなら児童館図書室はOFFの場所、こどもがリラックスできる本を選びましょう。
- いい絵本がたくさん置いてあるので有効に活用しましょう。
- 小さい子の本は低い棚、大きい子の本は高い棚という風に配架を工夫しましょう。
- 古くなって背表紙のタイトルが読みづらくなったら手書きで書いてあげるなど、本の修理をしましょう。

そこで、3年生以上の児童を対象に図書隊員を募集することにした。ポッチャマイスターのように大会を企画運営するアクティブな活動ではなく図書室をよくする活動ということで、本好きの高学年女子を中心に1期生4名、2期生3名が隊員となり、現在は3名が活動している。先ほどのアドバイスをもとに、以下の活動に取り組んだ。

- ①すべての本をいったん本棚から出して本棚を掃除し、本の状態を確認した上で配架に工夫して本棚に戻す。
- ②どこにどのような本があるか示す表示と「本を大切に」ポスターを制作する。
- ③新規に購入する本を選定し、本が届いたらブックカーをかける。
- ④1階育成室（学童保育の部屋）に置いている本と図書室の本を定期的に入れ替える。本を全て床に並べ本棚を掃除し、本を修理したり廃棄したりするということは何年ぶりだった

ただろうか。図書隊員のこどもたちの力がなければおそらくできていなかったと思う。ブックカーをかけることはこどもたちにとって初めての体験で、しわになったり少しゆがんだり失敗もあったが、図書隊員は自分たちがよりよい図書室をつくったという大きな達成感を味わうことができた。本の整理や入替の活動を継続するとともに新規購入図書を図書隊員の意見をもとに決定する取り組みを進めている。

## (3) ミニハロウィン中学生企画

偶然の出来事から始まったのが、この企画である。令和4年9月のある土曜日に小学校時代に学童保育を利用していた中学生が児童館に遊びに来た。雑談をしているうちに「コロナでワイワイフェスタ（地域をあげたハロウィンイベント）がないから、せめて児童館だけでもミニハロウィンをやろうと思うけど中学生で何かやってみないか？」と問いかけると「ぜひやってみよう」という話になり、仲間を募ることになった。最終的に8名（男子3、女子5）が集まり、話し合いの末「お化け屋敷」をやることになった。当然授業があり部活動がある中で準備するので苦労は並大抵ではなかっただろうが、当日に多くのお客さんが入り悲鳴をあげたり驚いたり喜んでくれたりする姿を見て、大変満足していた。しかし、リーダー格の女子は「もっとやれたように思う。」と少し悔しさをにじませてもいた。彼女は夜遅くまで自室で火の玉づくりをするなど、睡眠時間を削って頑張ってくれていたのだ。

その後も中学生向けにチラシを作って行事のボランティアを募集しているが残念ながら応募はなく、ここは少し課題だと感じている。ただ、以前のように（強制というわけではないが）部活動単位でやってきて活動するより自発的に活動してほしいという思いは強い。5年間のひよどり台児童館勤務で地元の中学生の知り合いも増えたので、口コミを活用するなど、やり方を工夫しながら今後も中学生に呼びかけていきたいと考えている。

行ってみたい・遊んでみたい・いっしょに何かやってみたい児童館を目指して

#### 4. 児童館を地域の子育ての核に ～地域・他団体との連携～

児童館の職員だけでできること、出せるアイデアは高が知れている。行事を長く続けることは素晴らしいことだが、マンネリ化してしまうという不安や危機感が常にある。神戸市内の児童館同士では情報交換や研修の機会も多くあるので、そこで他の児童館から学び、当館の行事などに生かすことも多い。しかし、児童館を地域の子育ての核にするには積極的に地域団体などとの関係づくりを進め、地域を巻き込んで地域のリソースを生かした事業を推進することが肝要であると考え、次のような実践を積み重ねてきた。

##### (1) 一般社団法人神戸 YJB (以下 YJB) と

前述のポッチャ体験教室で知り合った人権擁護委員の A さんにポッチャマイスターの指導や大会企画のアドバイザーをお願いしていたが、この方が YJB のメンバーだった。YJB は神戸市北区の児童館などでこどもたちにもものづくりを中心とした様々な遊びを提供してくれる NPO である。ひよどり台児童館とも一緒に事業をやりたいと言っていたので、令和 2 年度から毎年 10 回前後当館を訪れ 1 年生を中心にバルーンアートなどのものづくりを中心とした遊びの指導をしてくださっている。児童館行事にも工作があるが、YJB の工作では材料や道具をふんだんに使わせていただき、こどもたちの自由な発想を大切にしている。児童館行事にも工作があるが、YJB の工作では材料や道具をふんだんに使わせていただき、こどもたちの自由な発想を大切にしている。児童館行事にも工作があるが、YJB の工作では材料や道具をふんだんに使わせていただき、こどもたちの自由な発想を大切にしている。児童館行事にも工作があるが、YJB の工作では材料や道具をふんだんに使わせていただき、こどもたちの自由な発想を大切にしている。

##### (2) レイラ・ジャパン

##### (Reiwa Learning Academy Japan) と

令和 3 年、知人であるひよどり台在住の元小学校長から、児童館にポスターを貼ってチラシを置いてほしいと頼まれたのが「ひよどりキッズサイエンスアカデミー」というものだった。ひよどり台のこどもたちに少しでも科学に興味をもってもらいたいという思いから、親子で科学の不思議を学べる無料イベントで、講師は神戸大学サイエンスカフェ学外研究員であり

新井サイエンス学習センターを主宰する新井敏夫博士だった。チラシを拝見すると、会場がひよどり台の奥まった場所にある空き家だったので「せっかくの素晴らしいイベントをやるには少し場所が悪いように思う。次は児童館でやってみませんか。」と持ち掛け、まず会場の提供からスタートした。その後は計画段階から関り、資料や教材の提供などについても協力し令和 4 年度からは共催で年間 5 回実施している。先日 (11/18) は、第 11 回を「文房具のヒミツ」というテーマで開催し、上を向いてかける加圧式ボールペンや摩擦熱で消えるフリクション色鉛筆などのしぐみに、6 人の参加者が驚いたり感心したりであった。毎回興味深い内容なのだが、科学という言葉に抵抗があるのか参加者は伸び悩んでおり、今後の課題である。

##### (3) その他の連携活動

ひよどり台クラブ (老人会) とは長年交流を続けている。具体的には夏休み宿題教室 (7 月)、グランドゴルフ教室 (9 ～ 11 月・6 回開催)、交流会 (クリスマス会・12 月) がある。ひよどり台連合自治会主催ハロウィンイベント「ワイワイフェスタ」でのブース展開、ひよどり台 2 丁目こども会主催「夕涼みの会」での工作コーナー設置、ひよどり台青少年育成協議会主催「春のこどもまつり」の中学生ボランティアによるブースへのゲーム提供、毎月第 4 土曜日のひよどり山プレーパークなどで地域とのつながりを強めている。コロナ下の活動自粛を経て様々な活動がようやく元に戻りつつあるところだ。それに加え、今年度は児童館が取り組む新しい防災訓練としてひよどり台防災ジュニアチーム、ひよどり台防災福祉コミュニティと連携した防災教室を 11 月 11 日に開催した。

#### 5. 5 年間の実践を振り返って

当初掲げた 3 つの目標について、その成果と課題を考えながら 5 年間の実践を振り返り、今後の展望についても考えてみたい。

○認知度アップで自由来館を増やす～広報と行事の充実～

X (旧ツイッター) や ICT システム「安心でんしょぼと」の活用と、それに伴う行事の web 申込について、多くの保護者が抵抗なく受け入れてくれた。X のフォロワーや「いいね」の数は徐々に伸びており、「安心でんしょぼと」での告知に既読のつく割合も増えた。副産物として大幅に用紙や印刷の経費を抑えることができたこともよかった。ただ、大きな成果があったとも言えない。もっと児童館の情報を見もらうために、どうすればいいのか。そのためにはアナログへの回帰、口コミの重視がポイントだと考えている。

具体的には児童館内の掲示を見直している。これまでは来館者に見ってもらうことを目的に館内掲示を中心に行ってきたが、最近は通りすがりの人の目に留まる掲示を心がけている。たとえば、「最近の X はこんな感じ」と題したタイムリーな掲示物を児童館入口に外向けに貼っている。これによって前を通った方に「児童館が X をやっているのか」「児童館は昨日そんな行事をしたのか」と思っただき、児童館への関心が高まって X のフォローにつながったり児童館のことが日常会話の話題にのぼったりすることで児童館を訪れるきっかけになることを期待している。

コロナ下でも行事を続けたことで、多くの方が行事に参加してくれたし自由来館者数はコロナの3年間で減るどころか伸びている (利用者総数: 令和2年度 1177名、令和3年度 1812名、令和4年度 2683名)。行事をきっかけに、ふだんの日にも気楽に遊びに来てくれるいわゆる常連さんが増えている。午前中の親子連れにも、午後の小学生にも顔なじみが増え、友だちを連れて来てくれて輪が広がっており、児童館が日常生活に少しずつ溶け込みつつあるのは大変うれしいことだ。

しかし、今夏実施した夏まつりの入場者数 (115名) は、当初の見込み (150名程度) を下回ってしまった。コロナ明けで外出自粛の意識が大幅に薄れ、夏休みは地元の児童館のお祭りより、これまで我慢してきた旅行やレジャー

に出かけた人が増えたと推測される。コロナ下で実施してきた感染対策や行事のやり方について見直しが迫られているところで、コロナ前に戻すだけでなく現状に見合った行事づくりが喫緊の課題だと考えている。

定例行事の企画は通常1カ月ほど前の職員会で話し合われ例年通りで決まることが多かったが、早めに企画することと前例踏襲にとらわれないことを意識して行事づくりを進めるとともに、時代のニーズに合った新しい行事づくりにも取り組んでいきたい。

#### ○こどもの手で児童館をつくる～こども主体の行事づくり～

学童保育を利用している高学年児童に活躍の場を与える取り組みに、一定の成果はあった。学童保育の利用をやめても行事に関わってくれている児童がいることはそれだけ活動にやりがいを感じている証拠であり、児童館としても大きな喜びである。しかし、活動を継続してくれる児童がいる一方で新規の募集に対しては応募が減っている現状がある。

この3年間は一斉休校があったり多くの学校行事が中止されたり、マスク生活でコミュニケーションに課題が生じたりと、これまでと大きくかけ離れた学校生活だった。そのため、特に低学年から高学年への成長過程において身に付けるべき「集団において役割を果たす意識」が十分発達していないことが多く、いつまでも幼く自己中心的な児童が目立っている。人の役に立つことで喜びや自己有用感を感じられるよう、高学年になったときに何か役割を与えそれを果たしたことで大いに評価される機会をこちらが積極的に仕掛ける必要がある。こちらの呼びかけに応じてやる気のある子がやってくるのを待つようなことではだめだろう。そのような観点から高学年をリーダーとした学童保育の生活や行事を多く取り入れていきたい。そのような取り組みが行事の新しいスタイルを生み、新たな顧客 (来館者) を創出できる可能性も出てくると考える。

行ってみたい・遊んでみたい・いっしょに何かやってみたい児童館を目指して

○児童館を地域の子育ての核に～地域・他団体との連携～

ひよどり台地域は以前から地域活動が盛んである。私が教育委員会事務局に勤務していた約15年前、神戸っ子応援団（地域住民がこどもたちの応援団となって健全育成を図るという施策）が神戸市で始まったが、その第1号がひよどり台のひよどりっ子応援団であった。今やどこでも行われている登下校の見守り活動は言うに及ばず学校園での学習支援、今は珍しくなった夏休みのラジオ体操、夏休み中の地域施設のこどもたちへの開放、こども向けの様々な行事、こども食堂など、こどもを地域で守り育てる活動は枚挙にいとまがない。中でも最も驚いたのは、毎日、小学校の玄関で地域の方が来訪者の受付をしていることである。神戸市内には約160の小学校があるが、そんな学校はひよどり台小学校だけである。先日は小学2年生生活科の「まちたんけん」で約20班が地域の施設を訪問したが、1班に1人の見守りボランティアが同行していた。

このように地域にこどもを支えるリソースがもともとあったことで「児童館を地域の子育ての核に～地域・他団体との連携～」という目標は比較的達成しやすいものであった。少し努力して「児童館、最近頑張っているなあ」という印象をもっていただけで、自然と協力を引き出すことができた。また、YJBやレイラ・ジャンのような出会いも幸運だった。

それに加え、今年度からKOBEシニア元気ポイント活動（65歳以上の市民にボランティア活動を奨励し活動にポイントを付与する制度）の受入施設になり「できるひとが できるときにできることから」（神戸っ子応援団の精神）という気楽なスタンスで活動してくださいと地域の高齢者に積極的に広報した結果、現在12名の方が活動してくださっている。

しかし、地域の各団体との交流を深め支援や協力をいただけるようになってわかった心配事がある。それは活動している皆さんの高齢化と後継者や活動者の不足である。ひよどり台ク

ラ（老人会）ではやっと昨年会長が交代したが、引退した前会長は90歳というご高齢であり、現会長もまもなく80歳を迎える。ひよどり台青少年育成協議会では諸事情から前会長が退任することになったが予定していた方が仕事の都合で次期会長を固辞したため引退した高齢の元会長が返り咲くことになった。ひよどり台連合自治会も会長の後継が見つからず在任期間が長期化している。共働きが当たり前となり役員のみならず手がいない、負担が大きいなどの理由から小学校PTAは解散し、中学校PTAは活動を休止している。こういった問題は児童館で何とかなることではないが、事情を知るにつけ不安は募るばかりである。

## 【今後の展望】

最後に、5年間の実践を踏まえ今後の展望について考えてみたい。

ここまで述べてきた通り3つの目標設定は間違っていなかったし、一定の成果があったが一方で課題もあった。「じどうかん こども Do まんなか」キャンペーンで目指しているような児童館の「社会的認知の向上」と「こどもの居場所としての役割の充実」を図るには、どのような取り組みがこれから必要だろうか。

日本の少子高齢化は深刻な状況であり、児童生徒数の減少で学校の統廃合は進んでいる。児童館数は横ばいから微減の傾向だが、民営児童館が増えているのに対して公営は減っている。児童館はこどもの数が減ったから減らすというものではないと思うし、更に公営が減っていることは残念である。少子化対策の一環としてこそ児童館の存在意義があるのではないか。大きさに言えば、ひよどり台児童館があるから「こどもを産もう育てよう」と地域の皆さんに思ってもらえることが私の理想だ。地道に地域社会との交流を重ね行事や広報活動等を通して地域に児童館の存在をしっかりと知っていただき、地域の皆さんといっしょに子育てしやすい町「ひよどり台」を創りあげたい。

巷では日本に勢いがあった時代へのノスタル

ジーなのか、昭和・平成ブームが到来していると聞いた。昭和がすべてよいとはまったく思わないが、今にはないよさもいくつもある。昭和にこども時代を過ごした私が考えるよさの一つは「おせっかい」だ。近所に一人や二人は世話好きや口うるさいおじさんやおばさんがいて、それを私はこども心にうっとおしいと思っていた。しかし、今思えばありがたいことが多かった。例えば、湯船に入る前にかけ湯でさっと体の汚れを流す、風呂上りには体の水けを手拭いである程度拭って滴り落ちる水で脱衣場の床を濡らさないようにする、といった銭湯のマナーは親ではなく近所のおじさんから教わった。だから、これからのひよどり台児童館は、「こども」に「親」に「地域」におせっかいな児童館を目指していきたい。その手始めとして、来年度に取り組みたいこととして次の二つを掲げている。

まず、学童保育利用者に対する「おせっかい」として、長期休業中や代休日の弁当販売を実施する。これは既に多くの学童保育施設で行われていることだが、当館ではこれまで実施されてこなかった。

こどもにとっては手作り弁当がいいに決まっているが、仕事の都合など様々な事情で40日間の夏休みに弁当を作り続けるのが負担という保護者も少なくない。毎日手作り弁当を持参するこどももいるが、パンやサンドイッチ、コンビニ弁当を持参するこどもも結構いる。きつと保護者も大変なのだろうと思い、時々手抜き息抜きができるチャンスをつくってあげたい。しかし、職員の負担は増やしたくないので注文から支払いまで保護者と弁当業者の間で完結し、職員は届いた弁当を児童に渡すのみとし、弁当容器や残飯は児童に持ち帰らせ家庭で処分してもらうというシステムを構築すべく準備を進めているところだ。

二つ目は、中高生への「おせっかい」だ。近隣に高校がないので、中学生をターゲットに考えている。18歳までの居場所であるはずの児童館だが、当館は中高生の利用が少ないし中高

生向けの行事などもほとんどやったことがない。土曜日に部活帰りの中学生が立ち寄りたり、部活動が休みで暇だからといって遊びに来たり、それもほとんどが学童OBだ。トライやる・ウィークで活動した中学生に児童館は中高生も来ていいから遊びにおいでと言っているが、実際に遊びに来る生徒は少ない。

そこで考えたのが「中学生持ち込み企画」だ。これは、中学生が自らのアイデアで0～18歳の利用者のために児童館のイベントを企画し、自分たちで運営するというもので、採用された企画の経費は児童館が負担する。中学生が興味を示してくれるか不安もあったが、先日、珍しく4人の中学生が遊びに来たので企画を伝えようと「やってみよう」と全員が言ってくれ、手ごたえを感じることができた。文部科学省は「主体的・対話的で深い学び」でこどもの思考力や応用力を高め社会とのかかわりの中でよりよい人生が送れるような大人に育てたいと考えているようだが、ひよどり台児童館では「主体的・対話的で深い遊び」で中学生にイベントをプロデュースする苦労や自ら企画したことでこどもたちを笑顔にできる喜びを体験してもらい、それが一つのきっかけになって自らの子育てだけでなく「地域のこどもは地域で育てる」という意識をもった大人になってくれたらうれしい。

このように、いろいろな「おせっかい」を仕掛け、ひよどり台で育つこどもたち、子育てする親たちを支援、子育てしやすい町「ひよどり台」を地域の皆さんとともにつくっていききたい。それが、今後のひよどり台児童館運営に対する私の心構えだ。